

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別改定承認第627号
令和三年一月二日発行(第百二十四巻第一号)

ホトトギス

一月号



風雅の小筥〔三十六〕

廣太郎

今回は俳句の内容という話では無く、少し恐縮な話ではあるが、最近ホトトギス社へ時々問合せが来る。その内容というのが

「『ホトトギス』は毎月送られて来るのですが、「花鳥諷詠」がここ数カ月送られて来ません。こちらの方が前金切れになりているかどうか調べて頂けませんか」

ということであった。お判りの方も多いと思うが、「花鳥諷詠」というのは公益社団法人日本伝統俳句協会（以下伝俳）が発行している機関誌である。結論から申し上げると、この団体とホトトギス社は全く別の組織であり、営業的な繋がりは一切無いのである。確かに三十余年前に伝俳が発足した当初はホトトギス同人の方々が中心となつて運営し、現在は会長は稲畑汀子であり、私も常務理事を務めているが、あくまでも個人の意思として協力させて頂いているのである。したがって伝俳の会員はホトトギスの同人や誌友とは限らない。反対に当初発足の目的として稲畑汀子会長が述べている事だが、花鳥諷詠を標榜しているホトトギスに入っていない人をむしろ歓迎している。これをお読みのホトトギスの読者は、必ず伝俳の会員にならなければならぬという事は一切無い。そして伝俳の会員はホトトギスを購読しなければならないという事も一切無いのである。勿論個人とすればホトトギスの仕事が生業なのでホトトギスの読者を増やしたいのが本音ではあるが、読者の方は是非この「違い」を把握して頂き、豊かな俳句生活を今後共送って頂きたいと思つてゐる。

旬日記 汀子

令和二年一月四日 芦屋ホトギス会

ラグビーがこんなに強くなりました
ラグビーや生きてゐればと思ふ人

一月五日 下萌句会

風花や明るき空と入れ替はる
かの日より二十五年の寒さかな
正月の花に埋もれてをりにけり
お雑煮の一人を待つてをることも

一月六日 ロイヤル俳壇

早梅のほころびぬしと庭に客
人数の揃ふまで待つ年賀かな
初夢になほ忙しさの躓いて来る
俯瞰せし街の静けさ年明くる

一月七日 大阪倶楽部新年会

山荘の表札を先づ書初に
野水仙淡路の旅の近づきて
骨折の腕癒えませと寒見舞
初旅の切符買ひたる安堵かな
書初の墨磨る力ありにけり
話題より話題継ぎゆく初句会
これよりは寡黙に戻り初句会

一月九日 清交社

祝ぎ心揃ふ人数初句会
ラグビーの話題勝敗なかりけり
勝敗を語るラグビー皆仲間
深く燃え左義長でありしかな
消え残るものその儘にどんだかな

一月十一日 年尾先生を偲ぶ初句会

刻々の富士の変幻雪を乗せ
影も又雪の富士山彩れる
頂の隠れて見えて初富士に

一月十二日 偲ぶ会二日目

初句会 偲ぶ心を持ち寄りて
新年の旅館の朝といふ修羅場

一月十四日 綿業倶楽部

これよりの過ぎ行く日々を追ふ寒さ
初富士を見て来し旅を語らばや
初旅は富士一周となりしこと
旅心 正月気分あるがまま

一月十五日 夏潮句会

会場は残る正月気分かな
恒例のどんどの用意客を待つ
初富士の旅より帰り又会へて
新年の挨拶を又繰返す
あるがまま生きてゆく日々松も過ぎ
梢崩れもう誰も居ぬ庭となる

一月二十一日 無名会

大阪へ行きし間違ひ乗初す
早梅の輝き白し客を待つ
暖かき島を訪ねる日も近し
白梅の見頃の会となりしこと
失敗も笑つてられぬ初句会
富士五湖を廻り来たりし初旅も

一月二十四日 時雨句会

早梅の輝く朝の来てをりぬ
若き日へいざなはれゆくラグビーに
ラグビーを終へて満身創痍かな
生涯の友とラグビー語らばや

歯科予約して新年のはじまりし
雪予報風予報聞き滞在す

熟寝して初夢の無き女かな
初句会とて改る心あり

一月二十四日 アネモネ句会

今日も又四温の朝の来てをりし
松の内てふ誕生日祝はるる
祝はれておしは卒寿よ初句会

一月三十日 きさらぎ句会

抜けてゆく正月気分身ほとりに
快晴といふ早梅の二三日
初旅を終へていつもの顔となる
濃紅梅ほぐるる早さ今年又

廣太郎旬帳

廣太郎

令和二年一月四日 芦屋ホトギス会

電話口より初孫といふ贈物
恵方より初孫といふ贈物
初夢に免許返納せし母が

たましひを寒九の水に預けをり
君悼む寒九の雨となりゆけり
鳥一羽寒九の空を統べゆけり
一月五日 野分会芦屋例会

年酒酌む晴風の君に見つめられ
芦屋カトリック教会鐘訝ゆる
幸せの色とは赤や年酒酌む
音と青間遠ひもして句座訝ゆる
一月八日 「俳句四季」巻頭三句

富士白く連山黒く日脚伸ぶ
春隣伊吹稜線模糊として
春を待つ六甲風菜と聴き
一月九日 土筆会

事務始旧仮名遣確かめて
火の山の威を鎮めゆく寒の雨
池普請して江戸の世を明かしゆく
臘梅の一輪に日の集まり来
一月十一日 高濱年尾先生を偲ぶ初句会

茅葺の屋根寒林に織り込まれ
裏といふ雪の富嶽にある矜持
千さんのお肌を守る寒の傘
雪被る富嶽稜線正しつづつ
雪女夜は大沢崩れ揺れ行く
一月十二日 オーバーを翻し行く

朝富士にオーバーを翻し行く
一月二十三日 年寿会

避寒宿美人女将で俳人で
生き柱冷たく歴史刻みゆく
天城越え富士の雪女と別れ
寒風先の先見る龍馬かな
年寿会二十回待つ春を待つ

竹林に臘梅の香の弾けをり
寒風に饒舌となる水面かな
一月十五日 蕉心会

浮寝鳥一羽に水の折れ曲る
寒の雨止めむば句心躍り出す
寒風に流れむつくり返された
雨男返上は初夢でした
葉隠れといふ万両の主張かな
山茶花の白は天帝誘へる
散ること命懸けて来たてしまふ
雪女連れて帰つて来てしまふ
一月十六日 前議員句会

地下鉄を出れば春待つ人出かな
小正月走り出したる都心かな
会館に一步入るより淑氣満つ
官邸の屋根より高く寒鴉
一月十六日 登高会

御降や六甲よりの風甘し
御降に命目覚めし大地かな
初孫を授かることも御慶かな
御降や摩耶の稜線整へて
水餅に水曝いてをりにけり
一月十七日 廣邦会

純色 純白といふ憂ひかな
寒椿 純白といふ憂ひかな
ラガー等に悲喜交々のホイッスル
一月十九日 まのあたり句会

冬 薔薇 一片ほどの恋心
一月二十日 北國文芸選考時
春 隣官庁街の昼下り
一月二十日 朝日カルチャー若草句会

終電の尾灯寒灯離しゆく
戦国時代の盛衰 冬 桜
飾焚く全校生徒 寒 中
寒灯下八十路最後の母の愚痴
一月二十日 日里学園句会

天の妻に代はりて水仕かな
帝の国の声めく雪起し

寒鴉白銀に置く句読点
雪起し越路の夜を眠らせず
寒鴉声の乾いてゆく日和
一月二十六日 野分会東京例会

戦闘機寒九の空に吸ひ込まれ
福引やティッシュの増えゆくばかり
一月二十六日 青嵐会東京例会

曇天をカンパスとして寒紅梅
ほつぽつと色付き初めし寒の園
寒鴉声の艶めく朝かな
探梅に高層ビルの育ちゆく
一月二十七日 天地一新年の集い

大琵琶の水嵩といふ春隣
近江路へ色を足しゆく寒の雨
一月二十八日 若水句会

凍蝶の日に舞ひ風に落ちゆけり
蒼天の色分け合ひて冬の草
寒灯下チエロはパツハの無伴奏
凍蝶に天使微笑み降りて来し
凍蝶の草濡れ色といふ主張かな
凍蝶の明日を信じてゐる動き
一月二十九日 NHK文化センター

春隣ビルの狭間にあふ日差
臘梅といふ探梅の歩幅かな
臘梅の香りを空を狭めゆく
春近き雲の迅さでありにけり
一月三十日 梅花祭選考時

早梅の静寂 日輪解きゆく
一月三十一日 「河内野」新年会

日脚伸ぶ方へ方へと旅三日
三寒の富嶽四温の伊吹かな
富士凛と雪のアルプス従へて
冬耕を車窓に嵌めて初句会
茶を淹れる君句やかに初句会

茶を淹れる君句やかに初句会

雑詠

廣太郎 選

日盛を歩く日課も老の意気
 日焼して老の闊達失はず
 暑に耐へてゆくにも老の底力
 心にも青空欲しき窓の秋
 路地に鳴くこぼるぎに星光りけり
 露けしや鼓動の止る刹那あり
 狭庭とて覆へば広し星月夜
 聞き流しみて陥りぬ虫時雨
 閑居にも慣れ秋声を溢れしむ
 途中より連れ立つ旅や秋涼し
 みちのくと思へぬ旅路秋暑し
 一片の美しき木の葉の語る旅
 秋拾手さげ袋に謡本
 水澄みて般若の面の瞬かざ
 化野の風を舞はせて花芒
 紫の折線どほり桔梗咲く
 腹太き案山子と出合ふ米どころ
 石庭の波なめらかに良夜かな

相模原 木村享史

同

福知山 松山牧子

同

香川 湯川 雅

同

長岡 安原 葉

同

神戸 和田華凜

同

東京 田丸千種

同

同

同

同

同

同

平行にあり天井と夏座敷
 句座となりけり縁側と夏座敷
 夏座敷までは上がらず縁に酌む
 泉湧く森の夕日をこぼしつ
 砂浜の君に手を振る立ち泳ぎ
 月見草濡れて夢二を待つてゐる
 宇宙森閑として夏落葉かな
 梅雨夕焼孤立無援をかなしまず
 疫病なほずしんずしんと夜の雷
 自転車の銀の漲り辻相撲
 酒弱くなりしこのごろ相撲見に
 聞き慣れの逸話ずるずる新走
 左折して真正面なる西日かな
 久々の雨の気配や稲の花
 蛸や雨の止みたる無人駅
 そこそこに学び夜食は全力で
 みづうみの光となりてあきつ飛ぶ
 秋日傘たたむや深き空の紺
 山の闇かぶさり来たるキャンプかな
 山の闇ならば涼しき星数多
 山峡の闇震はせて鹿の声
 逸れゆきし水の細さの滝となる
 蛸籠光の会話零したる
 蛸の天下でありし將軍塚

静岡 須藤常央

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雑詠句評（十二月号より）

わが窓に見ゆる宇宙や流れ星 東京 今井千鶴子

ご自宅の窓から夜空を見上げると、流れ星を目撃されたという。夜毎窓一面に繰り広げられる星座の展開は、恰もドラマを見ていくかのようで、小さな窓一面に映る星を宇宙と大きく捉えた。ご自宅の窓から流星を見られることなど、めったにあることではない。作者の幸運と強運に脱帽する。（さい雪）

夜でも明るい都会ではなかなか星を見るのは難しいのかも知れないが、秋の澄んだ空ではチャンスが少しはあるものだ。そんな一年の中でも数少ない日に御自宅の窓から流れ星が見えたのである。一期一会の喜びに浸っている作者の自宅でのリラックスした心持ちが感じられる句である。（廣太郎）

掛香やしのぶ椿子物語 西宮 本郷桂子

虚子の『椿子物語』のヒロイン、千原叡子先生は去る七月十一日に逝去された。心より御悔み申し上げる。写生文ふうなこの小説の筆致からして、フィクションではなく、叡子先生そのものの姿が描かれているに違いない。改めて『椿子物語』を読み返して、在りし日の御姿を偲んでいるのである。掛香をして、ということに、故人を慕う心が十二分に伝わって来る。（純也）

令和二年七月十一日、又一人虚子を知る人が亡くなった。千原叡子氏である。虚子から貰われた「椿子人形」は皆御存知であるが、それが遺品として永遠に虚子記念文学館に遺される事になった。虚子の小説「椿子物語」を味わいながら仄かな掛香の香りに個人を偲んでいるのである。（廣太郎）

天地有情

心子選

荒梅雨といふ戦場の真つ只中 熊本 岩岡中正
 懇懇と言つて聞かせてをれば雷 同
 生きてみてこそその再会秋涼し 長岡 安原 葉
 贈り主聞けば見ずとも今年米 同
 耕して地球の裏を垣間見る 東京 稲畑廣太郎
 耕して百万石を守る城下 同
 鬼灯や祈る形に手を合す 神戸 和田華凜
 秋草の風の高さに活けらるる 同
 達者かと問はれ日焼の腕を見す 相模原 木村享史
 一と回り若いと言はれ汗の老 同
 流星や辺りの星を遠ざけて 龍ヶ崎 今橋真理子
 鉦叩 小さき闇を守るかに 同
 穂芒に風の生まるる雨上り 東京 山田閨子
 日は高し遠くて近き終戦日 同
 ただ声が聞きたき電話秋深み 同 今井千鶴子
 過ぎてゆく一日を惜しむ秋深み 同
 窓あけて秋の空気はただ旨し 同 藤森荘吉
 気まぐれな生々流転秋の雲 同

網戸して隠れ棲むかに灯せる 仙台 赤川誓城
 亡き妻と半分づつや夜のメロン 同
 春月や母を迎へに原ノ台 鎌倉 星野 椿
 疲れたる母と手を組み春の道 同
 新涼を零して消ゆる朝の星 金沢 藤浦昭代
 夕虹にしのお歳月遠流の地 同
 はたたがみ一刻の涼恵みたる 東京 河野昭彦
 来て欲しき刻に素通りはたたがみ 同
 高原の葛咲き了り雲低く 群馬 中杉隆世
 生かされて残れる虫となりにけり 同
 新涼や絵の具何色より溶かす 神戸 浜崎素粒子
 新涼や斧に打たれし木の香り 同
 元号のすつかり馴染み月恍々吹田大橋 吹田 大橋 眺
 今年は無月の多き年ならめ 同
 極月の明滅 早き消防車 東京 今井肖子
 たこやきのすこししぼんで十二月 同
 しみじみと一人で仰ぐ盆の月 芦屋 黒川悦子
 新涼や金明竹の辺りより 同